

「白線の夜」

作

飯塚耕一

【あらすじ】

深夜のコンビニで働くベトナム人店員と、心に傷を抱えた女性客。互いに「線」の外に置かれた二人は、言葉ではなく行動で少しずつ距離を縮める。

【特記事項】

本作は「排外」を主題としながら、誰かを断罪したり、立場を代弁する事を目的としていません。誰かを救う物語ではなく、誰かを分類しないという行為そのものを肯定する作品です。

【文字数】

2481字

【登場人物】

ミン (24) コンビニ店員

白石結衣 (30) 会社員

ミンの妻 (22) ベトナム人女性

若者 A・B・C

男性客

ほか

○コンビニ・外観（深夜）

東京、某区。

寝静まった住宅街に煌々と光る看板。

○同・店内（深夜）

午前一時を指す時計。

淡々とレジ袋に商品を詰めるベトナム

人店員・ミン（男・24）。

スマホの電子決済画面を掲げる客。

スキヤナーを当てるミン。

「ピッ」と電子音。

レシートが出てくる前に立ち去る客。

ミン「ありがとうございました」

自動ドアが閉まり、静寂。

× × ×

棚に商品を補充するミン。

おにぎりのラベルを前に揃えて並べる。

段ボールを抱えてやって来る六十代

男性。

男性客「宅配、お願い」

ミン「はい」

小走りでレジに戻るミン。

計りに荷物を乗せ、端末を操作。

男性客「へえ、手慣れたもんだねえ」

微笑んで軽く頭を下げるミン。

× × ×

午前二時を指す時計。

モップをかけるミン。

自動ドアが開き、スーツ姿の白石結衣

(30)が入店。

無言で歩き、激辛カップ麺を手取る。

ミン、レジに先回りして、手を洗って

迎える。

ミン「いらっしやいませ」

白石「……(カップ麺を置く)」

ミン「レジ袋ご利用ですか？」

白石「(頷く)」

レジ袋にカップ麺と箸を一膳入れて差し出すミン。

受け取る白石。タッチ決済を済まし、

そそくさと出ていく。

ミン「ありがとうございます」

清掃へ戻るミン。

と、店内に戻ってくる白石。

電気ポットの前に立つ。

ミン「……？」

× × ×

清掃中のミン、ふと手を止め、見遣る。

イトインでカップ麺を啜っている

白石の背中。

時折、肩が小刻みに震えている。

ミン「……」

× × ×

涙をスーツの袖で拭いながら激辛麺を

啜る白石。

と、テーブルに箱ティッシュがそつと置かれる。

ハッと振り返る白石。

去っていくミンの背中。

何事も無かった様に床を拭いている。

白石「……」

× × ×

午前二時十分を指す時計。

若者三人が駄弁りながら入店。

若者A「でよ、でけえ荷物で通路塞いでるわけ。マジ頭来て、蹴り飛ばしてやったわ」

若者B「最近、そういう奴多すぎ。日本舐められすぎだから」

若者C「てか、その動画撮った？」

若者A「それな。あとで気づいたわ」

若者C「もったいな。めっちゃバズったのに」

お菓子やお酒をレジに持って来る三人。

ミン「いらっしやいませ」

若者A「十五番」

十五番の銘柄のタバコを取り出すミン。

ミン「レジ袋ご利用ですか？」

若者A「(聞こえておらず)この辺でも川沿いに結構いるみたいよ。今度行ってみねえ？」

若者C「何の為にだよ」

若者A「日本の治安を守るためだろうが」

爆笑するBとC。

ミン「……レジ袋ご利用ですか？」

若者A「あ？ ああ」

淡々と会計を進めるミン。

イトインからその様子を見ている

白石。

× × ×

午後二時半を指す時計。

雑誌コーナーの整理をするミン。

ちらりと店前の駐車場を見遣る。

先程の若者三人が座り込んでタバコ

を吸いながら大声で喋っている。

ミン「……」

白石「あ、もしもし」

声の方へ振り向くミン。

スマホで話している白石。

白石「今、南尾久二丁目のコンビニの前で大

声で喋ってる人達がいまして、すごくうる

さいんで注意しに来て欲しいんですけど。

私ですか？ 近所の者です。はい、よろし

くお願いします」

通話を切り、ちらりとミンを見る白石。

ほんの数秒、交わる視線。

が、すぐに背を向け、麺を啜る白石。

○同・駐車場（深夜）

放置されたお酒の空き缶やタバコの吸い殻を掃除するミン。

店から出て来て、ミンの様子を見つめる白石。

視線に気づき、顔を上げるミン。

二人の間に駐車場の白線が伸びている。

ミン「……？」

白石「……」

踵を返し、去っていく白石。

○白む空（朝）

○コンビニ・表（朝）

私服で出てくるミン。手には缶コーヒ

ーとカップ麺の入ったレジ袋。
ゴミ袋を取り替えている店員に、

ミン「お疲れさまでした」

と、頭を下げ去っていく。

○路上／アパート（朝）

登校する小学生達とすれ違いながら小
さなアパートへと帰るミン。

○アパート・ミンの部屋（朝）

1Kの間取り。雑然とした室内。

窓辺に座り、カップ麺を啜るミン。

聞こえてくる小学校のチャイム。

× × ×

夕方。カラになったカップ麺。

西陽にあぶられて眠っていたミン、目
を覚ます。

ミン「（大きな欠伸）」

枕元のレジ袋を手探りで漁り、缶コー
ヒーを出すと一口飲む。

○隅田川沿いのテラス（夕）

夕陽に染まった川面。

寝癖頭のミン、欄干にもたれて妻とテレビ電話。

妻（22）の背後に映り込む紅河。

妻の声「（ベトナム語）この川の水だっけってきつとそっちに流れついてるはずだわ」

隅田川を見るミン。

ミン「（ベトナム語）そう思うと何だか近い気がするなあ」

穏やかに会話する二人。

幸福に満ちたミンの顔。

× × ×

夜。一転、闇に包まれるテラス。

一人、歩くミン。

数人の外国人が屯している。

大声で話し、タバコをふかしている。

言語は不明。

足早に通る過ぎるミン。

○コンビニ・店内（深夜）

午前二時を指す時計。

掃除機をかけているミン。

と、スーツ姿の白石が入店。

電源を切るミン。静寂。

ミン「……（会釈）」

白石「……」

× × ×

イトインでコーヒーを飲む白石。ちらちらミンを見る。

手持ち無沙汰のミン。適当に棚の商品の位置を整えている。

白石「掃除機かけていいよ」

ミン「え？」

白石「気使って止めてくれてるんでしょ？」

ミン「……（会釈）」

掃除機をかけるミン。

騒音で充満する。

ふと呟く白石。

白石「……私ね、この前フラれたの。君はい子だけど妻じゃない、だって」

聞こえてないミン。

白石「引かれちゃったんだよね、線を。お前はこっち側の人間じゃないって……だからさ、少しだけ、あなたの気持ち……」

白石が話しているのに気づき掃除機を止めるミン。

ミン「やっぱりうるさいですか？」

白石「……ううん」

悲しそうな笑みを浮かべる白石。

きよとんとするミン。

沈黙を破るように、先日の若者三人が入店してくる。

○同・駐車場（深夜）

散乱するタバコの吸い殻やゴミを片付けるミン。

店から出てくる白石。

両者の間に敷かれた駐車場の白線。

徐に乗り越える白石。

一緒にゴミを片付け出す。

ミン「え……」

白石「店員だけが片付けなきゃダメなんてル

ール無いでしょ」

ミン「……ありがとうございます」

白石「こちらこそありがとうございます」

ミン「？」

星の無い空の下、ゴミを片付ける二人。

夜風が吹き抜ける。

完